

第1章 「めざす子どもの姿」

1 四日市市が進める教育の基本的な考え方

◆ 基本理念

「生きる力」「共に生きる力」をはぐくむ

平成23年度からスタートした「第2次四日市市学校教育ビジョン」の取組も3年が経過しました。本ビジョンでは、「生きる力」「共に生きる力」をはぐくむという基本理念のもと、将来の四日市市を担う人材の育成に努めています。

生きる力

将来、子どもたちにとって「生きる力」として必要な「問題解決能力」とともに、「豊かな人間性」やたくましく生きるための「健康・体力」は、「生きる力」を形作る大きな柱です。このビジョンにおいても、これらの資質や能力などを育成する取組を進めていきます。

共に生きる力

「豊かな人間関係をはぐくむコミュニケーション力」を大切にしながら、「共に生きる力」をはぐくむ取組を進めます。

◆ めざす子どもの姿を実現していくための3つの視点

子どもの姿から導き出された課題について、3つの視点から整理し、常にそれらを意識した取組を進めています。

段差のない教育

子どもの成長や発達に応じた指導方法の工夫や体制の整備を図り、より滑らかに接続できるよう努め、幼保小中の学びや育ちの連続性を大切にする教育を進めます。

途切れのない支援

特別な支援を必要とする子ども、いじめ・不登校に悩む子ども、問題行動を起こす子ども、外国人幼児児童生徒等に対し、学校区・園が関係機関や家庭・地域との連携を広げながら、ネットワークを構築し、乳幼児期から就労に至るまで途切れることなく、必要な相談や支援をきめ細かく行うことができる体制づくりに努めます。

家庭・地域との協働

学校・家庭・地域のそれぞれが担う役割と責任を果たしながら「地域とともに作る学校」の実現をめざし、学校と家庭・地域との協働をより進めていきます。

◆ めざす子どもの姿

輝く よっかいちの子ども

「生きる力」としての「問題解決能力」、「豊かな人間性」、「健康・体力」、そして、本市が大切にしている「共に生きる力」としての「豊かな人間関係をはぐくむためのコミュニケーション力」を育成することにより、それぞれ実現したい子どもの姿を次のように示します。

1 将来、社会人として生きるために必要な問題解決能力を身につけた子ども

各教科の基礎的・基本的な内容を身につけ、自分の考えをもち、自分で判断し、表現できる力や学習に取り組む意欲を高め、さまざまな問題に主体的に対応し、解決していこうとする資質や能力が向上しています。

2 自らを律しつつ、他者ととともに協調し、人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性を備えた子ども

自然体験・社会体験・生活体験や文化的な活動に積極的に参加し、豊かな人権感覚や規範意識を身につけ、将来において社会的に自己実現ができる資質や能力が向上しています。

3 自他の健康・安全について実践していく力やたくましく生きるための体力を備えた子ども

仲間と関わりながら進んで運動に取り組み、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ資質や能力とともに、自他の健康や安全について考えるなど、健康・安全を適切に管理し、改善していくための実践力やたくましく生きるための体力が向上しています。

4 他者の意見を聴き、自分の思いを伝える力を身につけ、互いに尊重し、共に向上する人間関係を築くための資質を備えた子ども

聴く力・話す力、自分と他者との関わりの中で行動できる力（社会性）が向上しています。また、他者を認め、互いに尊重し、共に向上しようとする意識をもって行動し、学習集団や生活集団、自主的・主体的活動集団の質が向上しています。

これらの力を兼ね備え、将来においても、自己の個性を生かし、他者ととともに協調し、主体的に社会にかかわろうとする社会人として成長していくことができる資質や能力を身につけた、本市のめざす子どもの姿を「**輝く よっかいちの子ども**」として示します。

基本理念

「生きる力」「共に生きる力」をはぐくむ

問題解決能力

豊かな人間性

豊かな人間関係をはぐくむ
ためのコミュニケーション

健康・体力

めざす子どもの姿
輝く よっかいちの子ども

めざす子どもの姿を実現していくための3つの視点

1 段差のない教育

2 途切れのない支援

3 家庭・地域との協働

重点目標

目標① 問題解決能力の向上

目標⑤ 就学前教育の充実

目標② 豊かな人間性の育成

目標⑥ 時代の変化に対応する教育の推進

目標③ 健康や体力をはぐくむ教育の充実

目標⑦ 家庭・地域との協働の推進

目標④ 特別支援教育の充実

目標⑧ 教職員の資質・能力の向上

施策・取組

2 重点目標の達成に向けた取組

◆ 重点目標の達成状況

重点目標の達成状況を把握するため、それぞれの重点目標に成果指標を設定し、その進捗状況を把握しています。

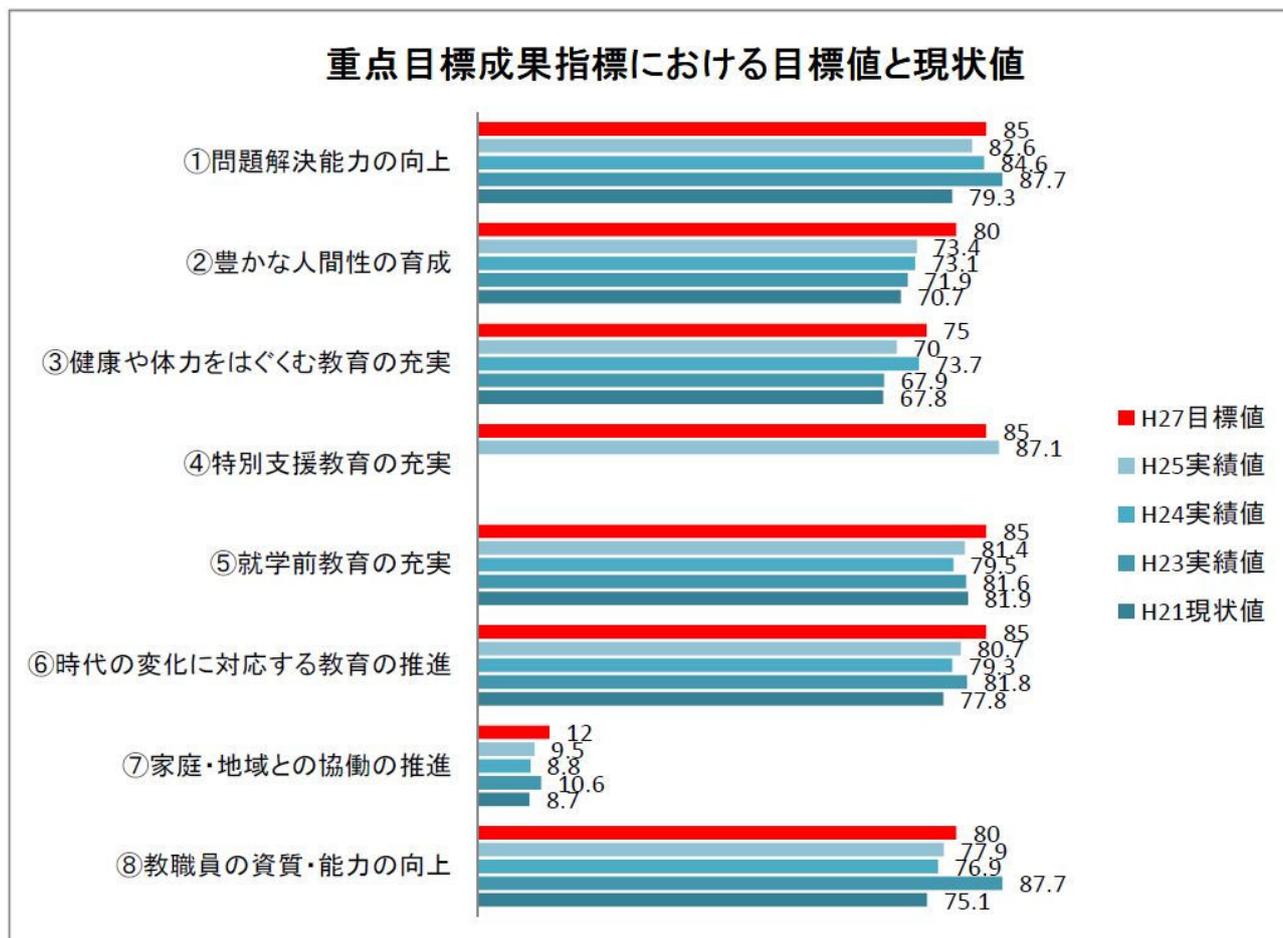
平成25年度の重点目標における成果指標の目標値と実績値

No.	重点目標	成果指標	実績値 (H25年度)	目標値 (H27年度)
①	問題解決能力の向上 基礎学力の定着を図り、学ぶ意欲を高く くむことにより、問題を解決する力を育成 するとともに、社会の中で共に生きる実践 的な態度や資質を育成します。	児童生徒アンケート 「授業で学習したことは、将来の役に立つと思 う」(4段階評価)において「そう思う」「まあ そう思う」と回答する割合 *全国学調 小6と中3の平均値	82.6%	85%
②	豊かな人間性の育成 さまざまな学習活動や生活体験を通し て、基本的な生活習慣や規範意識、自尊感情 や感動する心、他者と協調し、他者を思い やる心など、豊かな人間性を高くみます。	児童生徒アンケート 「自分には、よいところがあると思うか」(4段 階評価)において「よく思う」「時々思う」と回 答する割合 *全国学調 小6と中3の平均値	73.4%	80%
③	健康や体力をはぐくむ教育の充実 自他の健康・安全について実践していく 力や体力の向上を図り、生涯にわたって運 動・スポーツに親しみ、明るく豊かな生活 を営む態度や資質を育成します。	児童生徒(抽出)の体力テスト 総合評価(5段階)で3段階以上の児童生徒の 割合	70.0%	75%
④	特別支援教育の充実 一人一人の教育的ニーズを把握し、生活 や学習上の困難を改善する適切な指導や必 要な支援を行い、自立し社会参加するた めの基礎となる力を育成します。	保護者アンケート 「障害のある子どももいない子どもも、自分の力 を發揮して学習や様々な活動に参加している か」(4段階評価)において、「そう思う」「まあそ う思う」と回答する割合	87.1%	85%
⑤	就学前教育の充実 生涯にわたる人間形成の基礎を培う重要 な時期であることから、「生きる力」「共に 生きる力」の基礎となる力を育成します。	保護者アンケート 「お子さんは登園を喜んでいる」「園の生活や遊 びが楽しいと言っている」(4段階評価)におい て「そう思う」と評価する割合	81.4%	85%
⑥	時代の変化に対応する教育の推進 時代の変化により生ずる課題に対し、自 ら新しい知識や情報を得て、社会の変化の 中を主体的に生きていく力を育成します。	児童生徒アンケート 「将来の夢や目標を持っているか」(4段階評 価)において「そう思う」「まあそう思う」と回 答する割合 *全国学調 小6と中3の平均値	80.7%	85%
⑦	家庭・地域との協働の推進 保護者・地域住民が学校づくりに主体的 に参画する「地域とともに作る学校」の 実現をめざすとともに、家庭・地域の教育 力の向上の支援に努めます。	市政アンケート(※) 「家庭・地域の教育との連携」(5段階評価)に おいて「非常に満足している」「満足している」 と回答する割合	9.5%	12%
⑧	教職員の資質・能力の向上 教育への情熱を持ち、豊かな人間性を備 え、自己相互研鑽を積み、確かな教師力を 持った教職員をめざします。	児童生徒アンケート 「授業は、分かりやすいか」(4段階評価)にお いて「よく分かる」「分かる」と回答する割合 *全国学調 小6と中3の平均値	77.9%	80%

※表中『全国学調』の表記は、全国学力・学習状況調査を示す。

※市政アンケート…毎年度実施の市内居住の20歳以上の市民5,000人(無作為抽出)へのアンケート

下図は、第2次四日市市学校教育ビジョン策定時の現状値（平成21年度実績値）と本年度までの実績値の推移及び平成27年度の達成目標値を示しています。



重点①「問題解決能力の向上」では、「授業で学習したことは将来の役に立つ」との問いに対し「そう思う」「ややそう思う」と回答した子どもの割合が2.0ポイント低下しました。この成果指標については、問題解決能力の向上が基礎学力の定着を図り、学ぶ意欲をはぐくむとともに、社会の中で共に生きる実践的な態度や資質を育成することが大切であると考え、学力の数値より児童・生徒の学習意欲や目的意識を成果とする方が適切に評価できるとして設定したものです。

一方で、より客観的な数値を用いた指標による評価も必要であるとの指摘もあります。今後は、全国学力・学習状況調査の数値等、複数の指標による評価を実施することを検討していきます。

平成25年度は、『問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック』を全教員に配付しました。このガイドブックは、子どもたちの問題解決能力を向上させるための授業のプロセスや留意点などについて整理したものであり、これを参考にして授業実践研修を進めているところです。学習したことを活用して課題を解決できるように工夫された授業を充実させることにより、身につけた力が将来の役に立つと感じる子どもが増えるよう、授業実践を積み重ねていきます。

また、問題解決能力を高めるため、その資質となる「確かな学力」の着実な向上が求められています。今後も、小学校・中学校1年生 30 人学級等少人数教育、学びの一体化、ICTの活用、外国語活動・英語教育等、本市の重点施策をさらに充実をさせ、問題解決能力の基盤となる「確かな学力」の定着を図る必要があります。

重点②「豊かな人間性の育成」については、昨年度と比較して 0.3 ポイントの上昇が見られます。平成 21 年度の現状値から平成 25 年度に至るまで、「自分にはよいところがある」との問いに対して肯定的な回答をする子どもの割合が徐々に増加していることがわかります。

これは、豊かな人間性を育成するために、生徒指導・教育相談をはじめ、道徳教育、人権教育、読書活動など、本市の施策を総合的、調和的に推進したことによる成果であると考えられます。子どもたちが、基本的な生活習慣や規範意識を身につけ、他者と協調し、安心した学校生活を送ることができるようになってきており、そのような環境の中で、子どもたちの自己肯定感が高まってきていると言えます。

重点③「健康や体力を育む教育の充実」については、昨年度から 3.7 ポイント下降しました。本施策の成果指標については、昨年度まで児童生徒の抽出による体力テストの評価を用いていましたが、本年度から体力テストが全校実施調査となったため、指標の数値についても、全小中学校の評価の平均値を用いています。本年度の結果から、特に中学校2年生男子において評価の数値が低くなっており、持久力等に課題があることがわかりました。

本市では、平成 24 年度から小学校で、また本年度からは中学校でスタートさせた、授業の初めに行う「5分間運動」の取組を通して、子どもの運動量を確保しています。また、運動する子どもとそうでない子どもの二極化が課題であるといわれる中、体を動かすことの楽しさを味わわせるような取組を進めることも大切です。今後も、子どもたちの運動への意欲と体力の向上につながっていくよう、これらの取組のさらなる充実が求められます。

重点④「特別支援教育の充実」については、平成 24 年度まで、市政アンケート「途切れのない支援の充実」の評価を成果指標として用いていました。しかし、「よくわからない」と回答する割合が高い傾向にある一方で、子どもを持つ世帯については、「非常に満足している」「満足している」と回答する割合が高くなっていました。そのような経緯を受け、平成 25 年度からは成果指標を見直しました。保護者アンケート「障害のある子どももいない子どもも、自分の力を発揮して学習や様々な活動に参加しているか」(4段階評価)において、「そう思う」「まあそう思う」と回答する割合を新しい成果指標とし平成 27 年度の目標値を 85%と定めたところ、平成 25 年度においては、87.1%という結果になりました。

これは、教育委員会とこども未来部、健康福祉部が連携して早期から一貫した教育

支援システムを確立したこと、校・園内特別支援教育の推進体制の充実という本市の特長的な施策による成果であると考えています。今後も、一人一人の教育的ニーズを把握した適切な指導や必要な支援が行われていくよう、体制の整備に努めていく必要があります。

重点⑤「就学前教育の充実」については、昨年度に比べ 1.9 ポイント上回りました。幼保小連携つながりシートの活用や、就学前から小学校につながる保育・教育活動を計画的に行うなど、幼稚園と保育園・小学校との連携を密にすることで小1プロブレムの解消に努めており、その取組の成果が経年変化を通して示されているものと思われます。

重点⑥「時代の変化に対応する教育の推進」においても、昨年度を 1.4 ポイント上回りました。各中学校区では、就学前から小・中学校までの子どもの成長を見通したキャリア教育指導計画が作成され、それをもとに異校種が連携したキャリア教育の取組が広がっています。また、この計画に基づく一貫した指導の中で、社会の変化に対応し、より主体的に生きていく力を育成しています。今後も、学校のあらゆる教育活動をキャリア教育の視点からとらえ直し、体系的・系統的な教育活動の展開を促進することが大切です。

重点⑦「家庭・地域との協働の推進」については、各学校・園における学校づくり協力者会議の取組が充実し、その発展型である四日市版コミュニティスクール指定校は 14 校となりました。市政アンケートの結果は、平成 21 年度からほぼ横ばいとなっていますが、「非常に満足している」「満足している」と回答する割合は、他の教育分野のアンケート項目と比較してやや高い割合になっています。地域に開かれた学校づくりの取組が浸透し、家庭や地域にとって、学校がより身近な存在になりつつあることがわかります。

重点⑧「教職員の資質・能力の向上」については、昨年度と比較して 1.0 ポイントの上昇となりました。教師力向上研修の取組や評価の活動は定着し、個々の資質向上の一助となっています。その一方で、増加する若手教員の育成や授業実践を主軸に据えた校内研修のさらなる充実が求められます。本市では、よく分かる授業の実践のため、「問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック」の取組に加え、若手教員研修・ミドルリーダー研修等ライフステージ別研修などの充実を図っています。今後も、この取組を広く浸透させ、各学校において、OJTによる取組を充実させ、授業改善を進めていきます。

3 データから見える子どもの姿

平成25年度に全小中学校において実施した「全国学力・学習状況調査」等のデータからは、子どもの学力の状況とともに、学習を取り巻く環境が見えてきます。本調査結果のデータに基づき、四日市市の子どもの姿を分析しました。

1 本市の学力の状況（平成25年度全国学力・学習状況調査の分析から）

○本市における全国学力・学習状況調査 正答率の推移

本年度の本市の各教科の平均正答率は、小学校においては、国語のA及びB問題、算数のA及びB問題で三重県平均を上回りましたが、全国平均は下回りました。中学校においては、数学のA問題で全国平均を上回り、国語のA及びB問題、数学のB問題で三重県平均は上回りましたが、全国平均はわずかに下回りました。この数年間の経年変化を見てみると、小中学校義務教育終了時において本市の子どもには、ほぼ全国水準の学力がついていることがわかります。

小学校		国語		算数		理科	
		A(知識)	B(活用)	A(知識)	B(活用)		
平成19年度	本市	81.7	62	81.6	62.1		
	三重県	80.6	60	81.1	61.4		
	全国(公立)	81.7	62	82.1	63.6		
平成20年度	本市	64.1	47.8	71	50.1		
	三重県	62.9	47.1	70.9	49.7		
	全国(公立)	65.4	50.5	72.2	51.6		
平成21年度	本市	68.4	46.8	76	53.1		
	三重県	67.8	46.9	76	52.5		
	全国(公立)	69.9	50.5	78.7	54.8		
平成22年度 抽出校：40校 中、12校参加	本市	81.9	74.3	71.8	47		
	三重県	81.7	75.2	72.4	47.3		
	全国(公立)	83.3	77.8	74.2	49.3		
平成24年度	本市	79.1	51.4	72.6	56.1		58.1
	三重県	79.6	52.7	72.2	56.8		58
	全国(公立)	81.6	55.6	73.3	58.9		60.9
平成25年度	本市	60.7	47.5	76	55.8		
	三重県	60.3	46.7	75.8	55.3		
	全国(公立)	62.7	49.4	77.2	58.4		

中学校		国語		数学		理科	
		A (知識)	B (活用)	A (知識)	B (活用)		
平成19年度	本市	82.2	73	76.1	64.1		
	三重県	81.6	71	73.1	60.6		
	全国(公立)	81.6	72	71.9	60.6		
平成20年度	本市	73.3	60	65	50.7		
	三重県	72.6	59.4	63.7	49.3		
	全国(公立)	73.6	60.8	63.1	49.2		
平成21年度	本市	76.4	74.4	64.3	58		
	三重県	75.9	73.3	62.7	56.5		
	全国(公立)	77	74.5	62.7	56.9		
平成22年度 抽出校：22校 中、10校参加	本市	76.1	66	68.5	45.8		
	三重県	74.1	64.1	65.4	42.8		
	全国(公立)	75.1	65.3	64.6	43.3		
平成24年度	本市	75.8	63.5	64	49.5		52.2
	三重県	74	61.1	61.6	48		50.6
	全国(公立)	75.1	63.3	62.1	49.3		51
平成25年度	本市	75.9	66.6	64.5	40.6		
	三重県	75	65.8	63.2	39.3		
	全国(公立)	76.4	67.4	63.7	41.5		

各教科における課題について、国語科においては、書くことの指導を充実させるとともに、非連続型テキスト（文章や図表・グラフ、写真等が複合した教材）を活用すること、さらには文章を読んで自分の考えや感想をまとめる活動の充実、言語への関心を高め、言語感覚を豊かに指導する工夫などにより、国語科の弱みを克服する授業を実践していきます。

また、算数・数学科においては、算数的・数学的活動を充実させ、数学的な表現を用いて的確に説明する指導の充実を図るとともに、学習したことを活用して解決できるような授業を展開していきます。

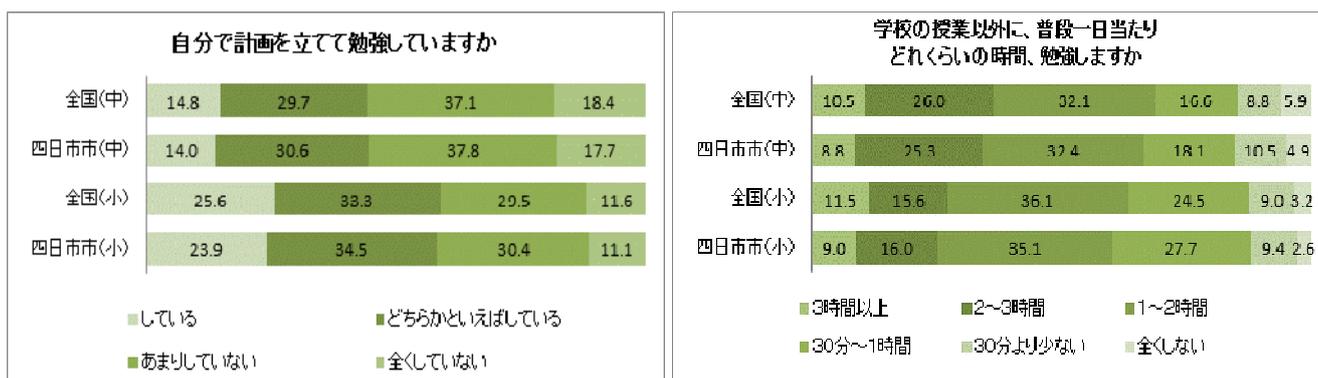
平成25年度は、本調査の趣旨等を踏まえた授業改善に積極的に取り組むとともに、本調査問題を活用した授業を行ったり、学力補充の取組を充実させたりするなど、『学力向上についての4つの取組』を提示し、学力向上についての重点的な取組を全市的に開始しました。今後も、この取組を継続し、教科における課題の克服に向けた授業改善を進めます。

○「確かな学力」の定着に向けて

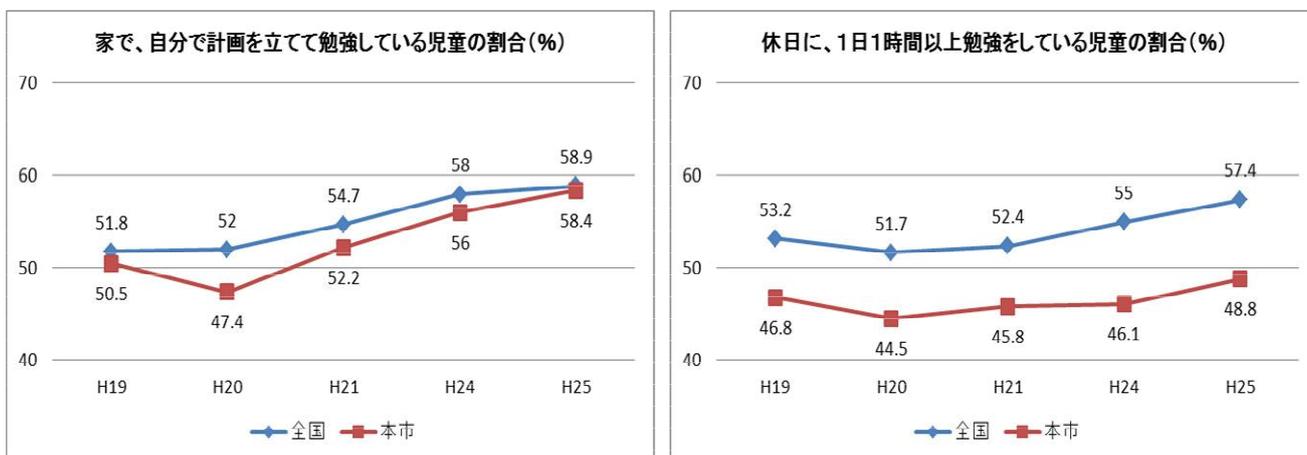
全国学力・学習状況調査では、児童・生徒質問紙による家庭での学習の状況調査や、学校質問紙による学校の取組調査も実施しています。

学校質問紙の回答から、「長期休業日を利用した補足的な学習サポートを13日以上実施した」学校の割合が中学校は40.9%（全国11.2%）と全国と比べて非常に高い割合となっています。多くの学校で補足的な学習の取組が積極的に実施されていることがわかります。一方、小学校においては、「長期休業日を利用した補足的な学習を行っていない」学校の割合が38.5%（全国34.7%）と全国に比べてやや高くなっています。学力向上に向けた長期休業日や放課後等の活用については、実施上の課題を整理するとともに、効果的な活用を進める必要があります。

児童・生徒質問紙から、自分で計画を立てて勉強している子どもの割合、学校の授業以外に勉強する時間については、以下のグラフのとおりです。



以前から、本市では小学生の家庭学習の定着に課題があるとされていましたが、本年度の調査では、計画的に勉強している児童の割合、休日に1日1時間以上勉強をしている児童の割合ともに、前年度と比べても増加しています。また、経年変化を見ても、小学生の家庭学習の定着が進んでいることがわかります。

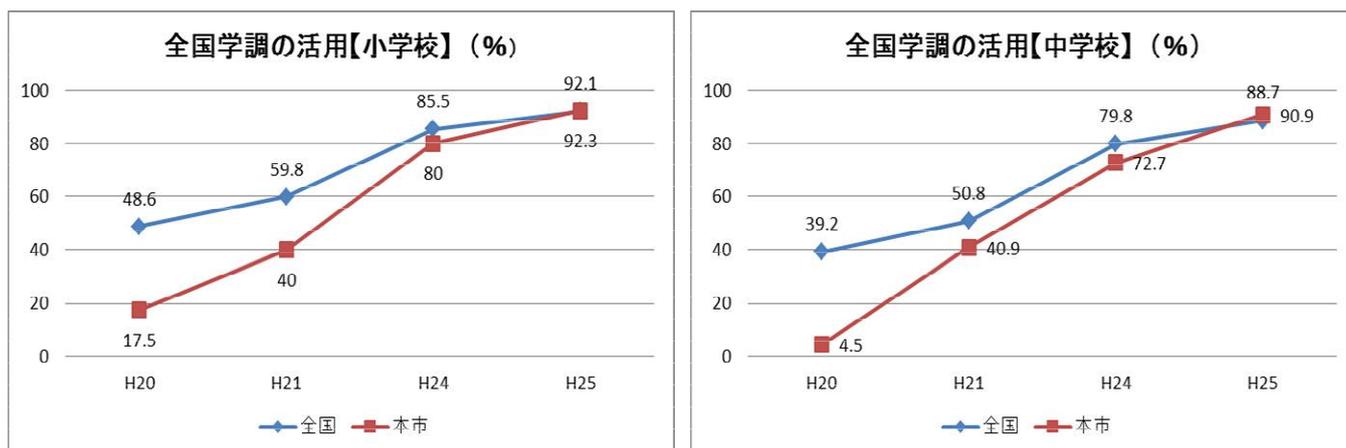


本市では、家庭学習の定着を目指し、小学校においては89.7%、中学校においては100%の学校が、家庭での学習方法等の具体例を挙げながら教える取組を進めています。このような取組の成果が少しずつ表れているものと考えられます。しかし、全国と比べると学習時間は少なくなっています。家庭での学習習慣と学力の関連は大きいと考えられることから、今後も、家庭教育での学習習慣の定着に向けて、保護者等に働きかけていくことが大切です。

○全国学力・学習状況調査の活用による教育活動の改善

全国学力・学習状況調査の問題冊子等や調査結果等を活用することは、子どもの学力向上において大変有効であることがわかっています。本市でも、それらの活用によって教育指導や教育活動を改善している学校が、年々増加しています。

平成25年度全国学力・学習状況調査や独自の調査等の結果を利用し
具体的な教育指導の改善を行いましたか

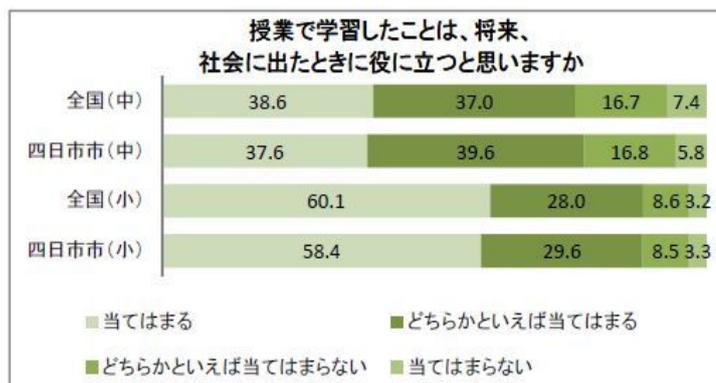


各学校において、学力向上のための取組が整備されてきたことは、本市教育の大きな強みです。今後は取組の質を向上させることにより、さらにステップアップした取組が求められます。

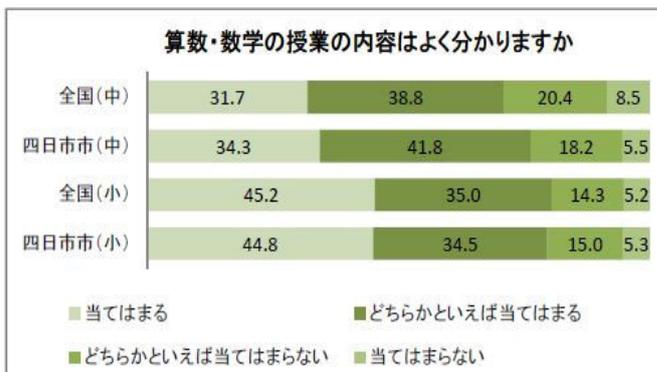
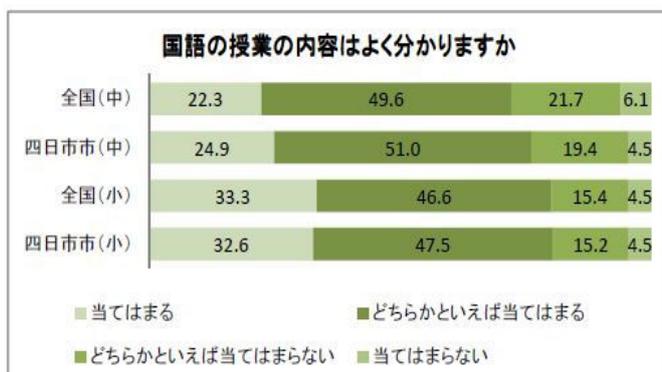
2 問題解決能力の向上

以下のグラフは、四日市市学校教育ビジョンが示す「問題解決能力を身につけた子ども」に関する質問に対して、平成 25 年度全国学力・学習状況調査（対象：小学校 6 年生・中学校 3 年生）における児童生徒質問紙の回答状況を全国平均と比較したものです。

右のグラフから、「学校で学んだことが将来の役に立つと思うか」との問いに対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と思っている子どもの割合は、小学校、中学校ともに、全国平均と同程度となっています。



国語科や算数・数学科における授業の理解度は、小学校においては全国平均と同程度、中学校においては全国平均よりやや高い傾向にあります。



本市においては、すべての小・中学校において、国語、算数・数学、英語を中心に少人数指導を実施しています。また、本市独自の「小学校・中学校 1 年生 30 人学級」の取組により、よりきめ細かな指導を行っています。

授業では、一人一人の児童生徒が考えたことを説明したり、問題ととらえたことを共に考えあって解決したりしています。さらに、授業で学んだことを日常生活で活用するなどの経験により、学ぶことの有効性を実感させていく必要もあります。

また、現在、本市独自に市内企業や JAXA との連携教育によって、特色ある実験や体験活動を取り入れた授業を実施し、児童生徒に感動を与え、学習への興味・関心を高めるとともに、実生活・実社会における学習の有用性を感じさせる取組を行っているところです。今後もこのような取組を充実させ、将来の職業生活に夢を馳せるような子どもの育成を目指しています。

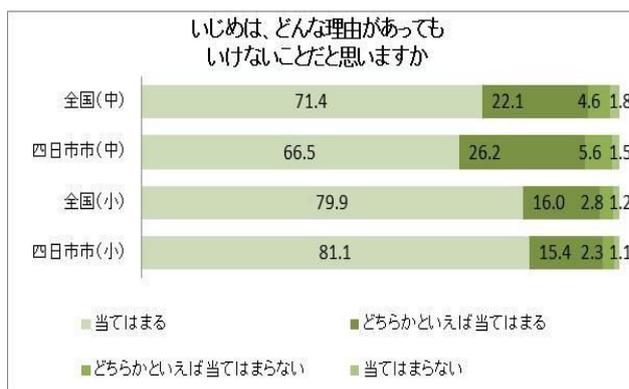
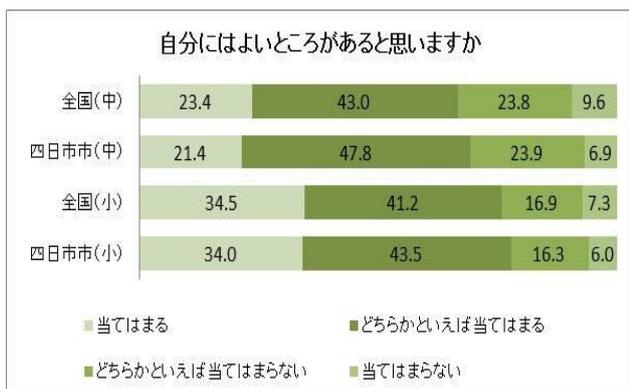
3 豊かな人間性

本市では、豊かな人権感覚や規範意識を身につけ、将来において社会的に自己実現ができるような子どもの育成を目指しています。

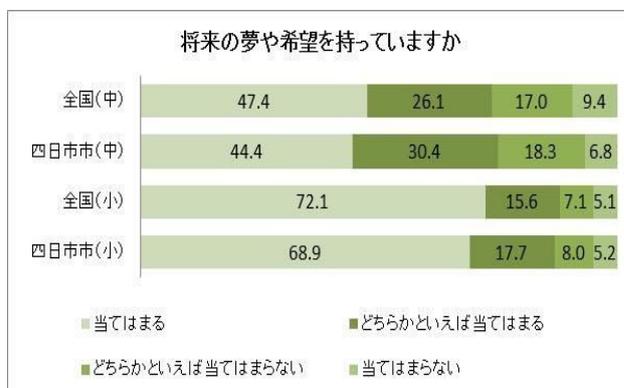
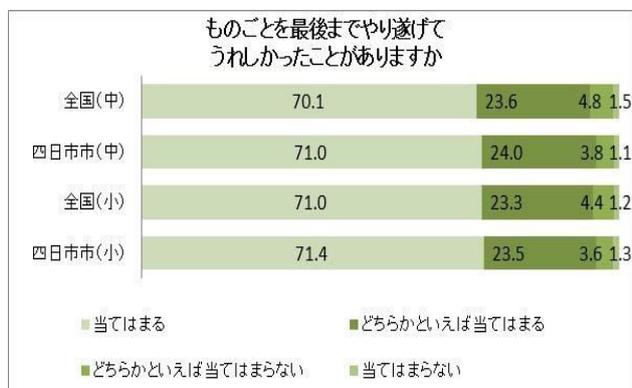
以下のグラフは、四日市市学校教育ビジョンが示す「豊かな人間性を身につけた子ども」に関して、平成 25 年度全国学力・学習状況調査（対象：小学校 6 年生・中学校 3 年生）における児童生徒質問紙の回答状況を全国平均と比較したものです。

下のグラフから、本市の子どもの自己肯定感については、肯定回答（「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」）をした子どもの割合が全国よりやや高い傾向にあります。ただし、中学校になると、小学校に比べその割合が下がることがわかります。

また、「いじめを許さない」と肯定回答した子どもの割合は、小・中学校とも全国とほぼ同じ傾向にあります。この設問においても「いじめはどんな理由があってもいけない」と肯定回答する割合が、中学校において下がる傾向にあります。いじめを絶対に許さない態度や行動力を育成するための指導の充実が必要です。



また、「ものごとを最後までやりとげてうれしかったことがある」「将来の夢や目標を持っている」と肯定回答した子どもの割合は、全国とほぼ同様の傾向を示しています。



今後も、自然体験、社会体験、文化的な活動等に積極的に参加させるとともに、これらの体験活動を通して達成感を持たせるような指導の充実が求められます。また、幼保小中が連携した一貫教育『学びの一体化』の取組において、将来を見据えたキャリア教育等を一層充実させる必要があります。

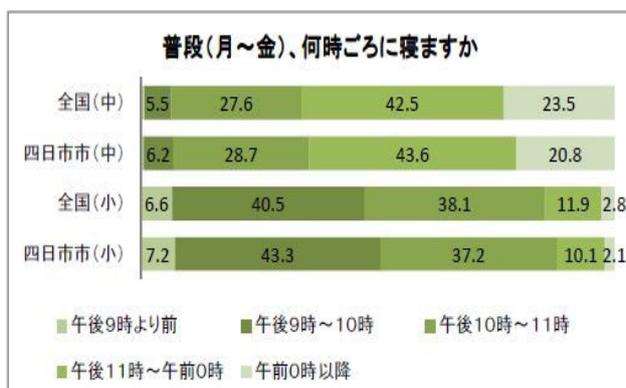
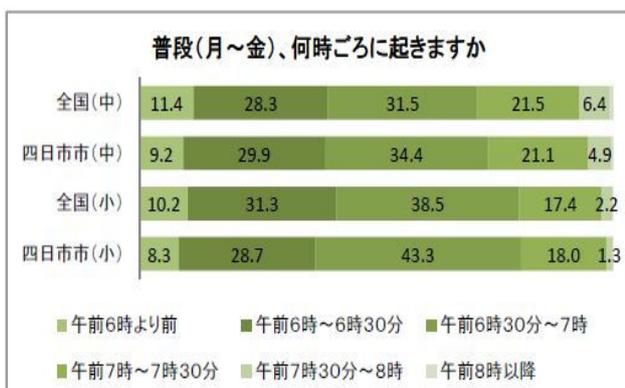
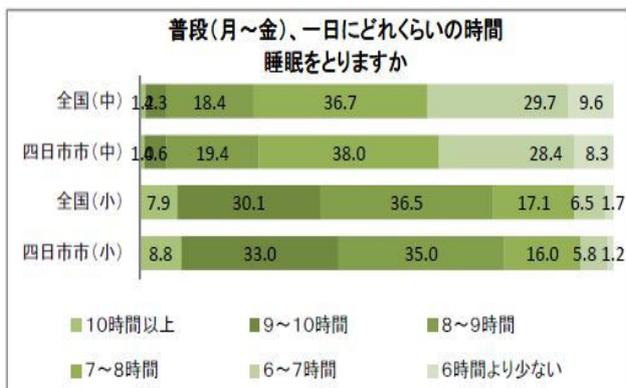
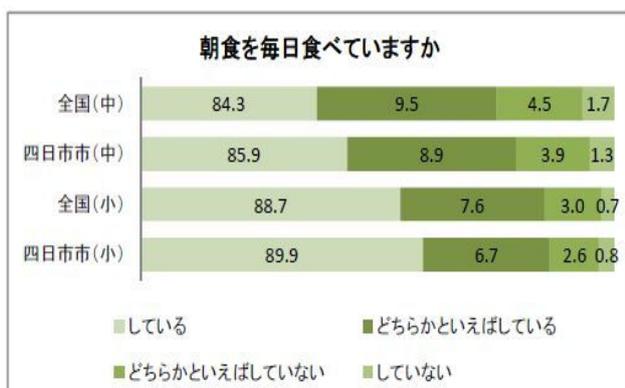
4 健康・体力

本市では、自他の健康や安全について実践していく力や、たくましく生きるための体力を備えた子どもの育成を目指しています。

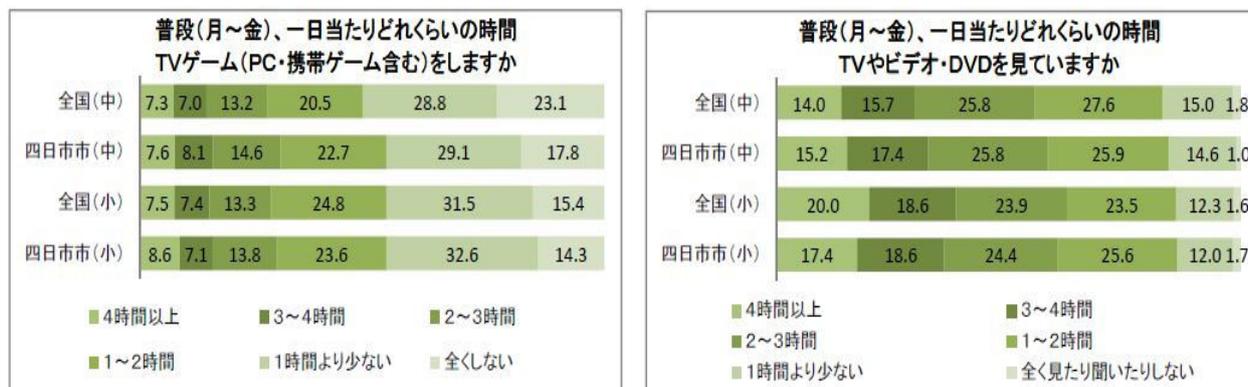
以下のグラフは、四日市市学校教育ビジョンが示す「健康・体力」に関する質問に対して、平成25年度全国学力・学習状況調査（対象：小学校6年生・中学校3年生）の回答状況を全国平均と比較したものです。

「朝食を毎日食べている」と肯定回答した子どもの割合は、全国平均と比較して高い傾向にあります。また、子どもの起きる時間・寝る時間については、全国と比較して、やや早い傾向にあり、睡眠時間も長くなっています。

これらの結果から「早ね 早おき 朝ごはん」市民運動の啓発が浸透するとともに、生活リズム向上のための実践テキストの活用や出前講座の効果が表れているものと考えられます。



子どもがテレビゲームやTV・ビデオ等にかかる時間は、小学校においては全国とほぼ同じ、中学校においてはやや長い傾向にあります。

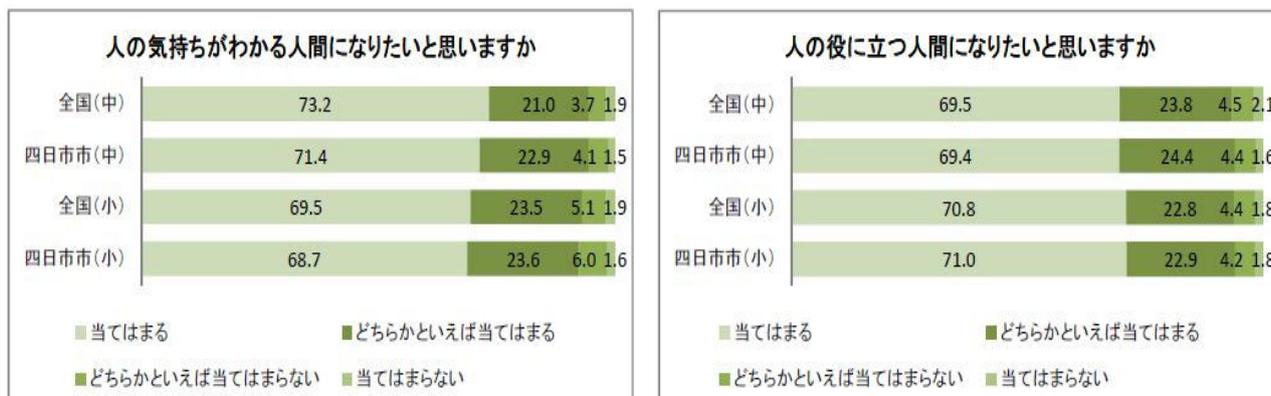


5 豊かな人間関係をはぐくむためのコミュニケーション力

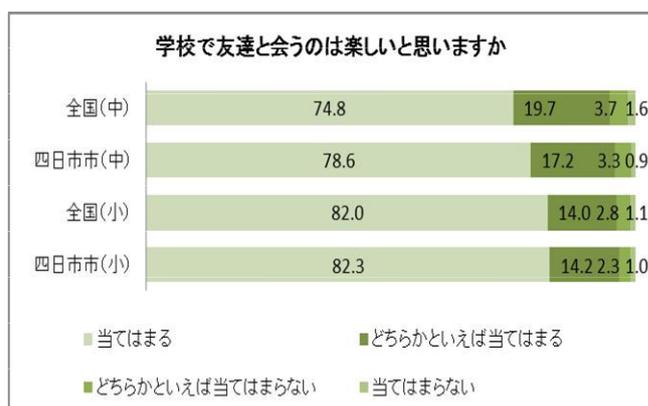
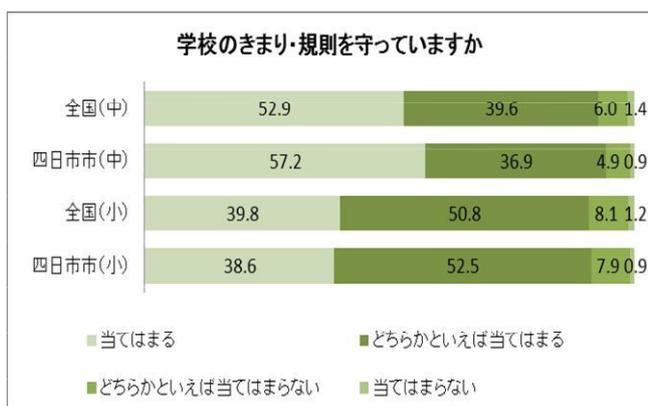
本市では、他者の意見を聴き、自分の思いを伝える力を身につけ、互いに尊重し、共に向上する人間関係を築くための資質を備えた子どもの育成を目指しています。

以下のグラフは、四日市市学校教育ビジョンが示す「豊かな人間関係をはぐくむためのコミュニケーション力」に関する質問に対して、平成25年度全国学力・学習状況調査（対象：小学校6年生・中学校3年生）における児童生徒質問紙の回答状況を全国平均と比較したものです。

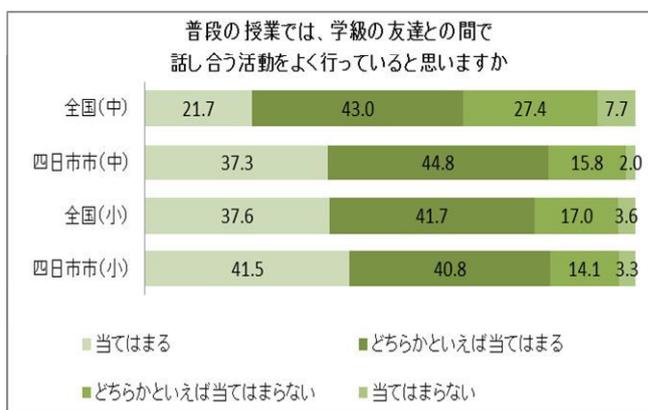
「人の気持ちがわかる人間になりたい」「人の役に立つ人間になりたい」と肯定回答した割合は、全国とほぼ同じ傾向にあります。「人の気持ちがわかる人間になりたい」の設問では、そうありたいと思う子どもの割合が、中学校において高くなっています。



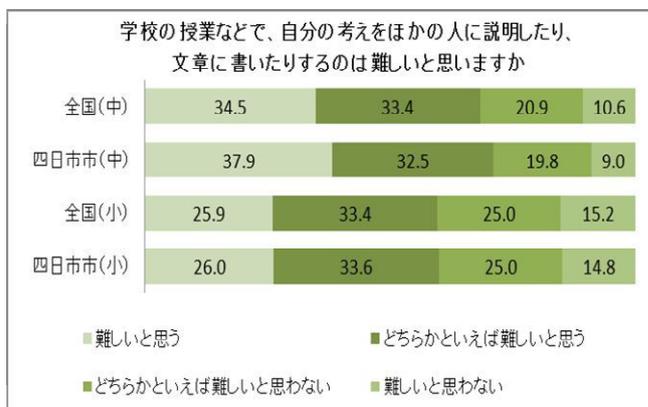
「学校のきまり・規則を守る」については、本市中学生の規範意識が全国と比較して高いことがわかります。また、「学校で友達に会うのは楽しい」と肯定回答した子どもの割合は、小学校においては全国より0.5ポイント、中学校では1.3ポイント全国平均を上回っています。小中学生とも、学校において友達との良好な関係を築けていることがうかがえます。



右のグラフから、普段の授業の中で話し合う活動を活発に行っている割合は、全国と比較しても非常に高い傾向にあり、特に中学校では11.4ポイントも高くなっています。学校質問紙においても、授業に話し合いの活動を取り入れている中学校の割合は100%となっており、本市の授業において、話し合い活動を活用した学び合いの授業が定着していると言えます。



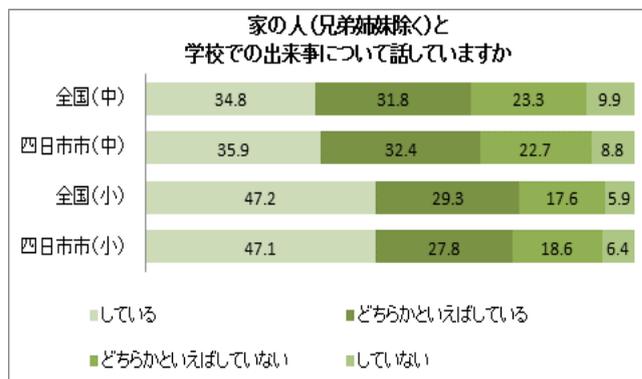
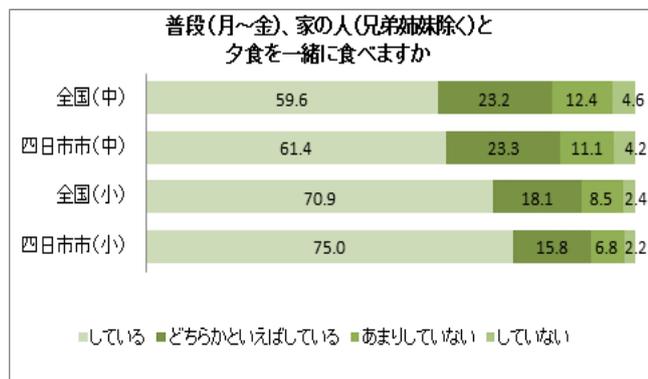
一方、自分の考えを説明したり書いたりする活動について、難しいと感じる子どもの割合は、中学校において、全国と比較してやや高い傾向にあります。



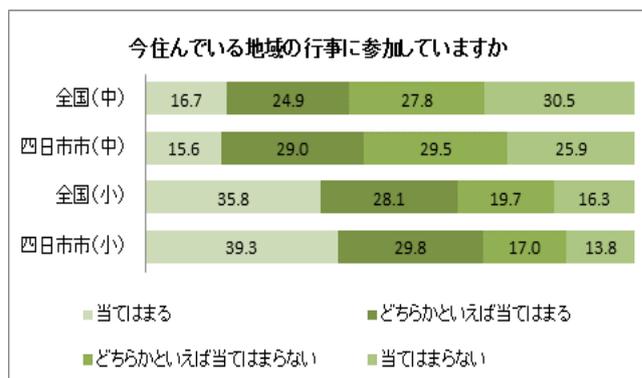
これらの結果から、本市の子どもは、会話による他者とのコミュニケーションの機会が充実しているものの、自分の考えを整理して説明したり書いたりするといった活動に対して、やや苦手意識を持っているといえます。

今後は、授業において、自分の考えをほかの人に適切に説明したり、文章に的確に書いたりする言語活動の充実を図ることが必要です。

家庭生活においては、「家の人と夕食を一緒に食べる」と肯定回答した子どもの割合が全国と比べて高い傾向にあります。また、「家の人と学校での出来事について話す」と肯定回答した子どもの割合は小学校においては全国平均よりやや低く、中学校においては全国よりやや高い傾向にあります。



地域とのつながりにおいては、行事に積極的に参加している割合は、小学校においては全国より5.2ポイント、中学校においては3.0ポイント高くなっています。学校や家庭といった限られた生活集団だけでなく、子どもが、広く地域社会と関わりながら生活している姿がうかがえます。



これらの結果から、本市の子どもは、他者を尊重し、他者との関わりを大切にしながら、良好な関係を築こうとする姿が見られます。また、学習集団や生活集団において、豊かな人権感覚や強い規範意識により、自主的、主体的に活動する傾向が見られることも、本市の子どもの大きな強みです。一方、「早ね 早起き 朝ごはん」運動の取組や、四日市版コミュニティスクール等の取組にも見られるとおり、家庭や地域社会が積極的に子どもに関わることにより、子どもの豊かな人間性がはぐくまれていることも、本市の特長といえます。

聴く力、話す力とともに、自分と他者との関わりの中で行動できる力は、将来の社会性の向上につながります。今後も、本市の取組の強みを生かしながら、子どもの豊かな人間性をはぐくんでいきます。